

一个鸡蛋的家当

北基行 記

卵一個が家産

“家当”とは家の担保ではなく、家産を意味する。しかもこの言葉に、それ相当の財産があるという含みがある。“当”は、もともとは“幣”と書いた。“幣(ど)”とは、貨幣を貯蔵する、金蔵のことで、“蕩”の読みと同じで、北方人がやさしい“当”の字をあてたので、口語では“家当”というようになった。

我々は普通、誰だれが家産を築いたと云えば、彼に相当の資産ができたことで、鶏の卵一個を家産とはいわない。しかし、最初に“見卵求富(卵を見て富を求む)”と云ったのは、莊子であるから、鶏の卵一個も馬鹿にしてはならない。

如何なる莫大な財宝も、蓄積の最初は、小さな数量から始まる。それは、裘という毛皮はキツネの腋の下の一部を集めて出来上がり、揚子江の大河も源流は一滴の水からはじまるのと同様である。ところが、どんな条件下でも卵一個あれば、家産を築くことが出来るかという、そんな簡単な話ではない。

明代に江盈科という小説家があった。彼の書いた小説に『雪濤小説』というのがあり、その中にこんな話がある。“一市人、貧なること甚し。朝に夕を謀らず。偶に一日、一



鶏卵を拾い得て、喜び而して其の妻に告げて曰く、我家當有り。妻問う安(いづく)に在る。卵を持し之を示して、曰く：此是なり、然れども須く十年して、家當乃ち就く。因りて妻と計り曰く：我此の卵を持し、鄰人の伏鶏を借りて之に乳せしめ、彼の雛に成るを待ち、中に就いて雌なる者を取り、歸し而して卵を生ましむ。一月に十五鶏を得るべし。兩年の内に、雞また鶏を生む、鶏三百を得るべく、十金に易えるに堪う。我十金を以て五 犆(し、めうし)に易へ、犆 復、犆を生み、三年にして二十五牛を得るべし。犆 生む所の者、三年にして百五十を得

べく、三百金に易うるに堪う。吾此の金を持し以て舉債し、三年間に、半千金を得るべしなり。”

この話の後半にまだ多くのストーリーが続くが、この話と直接関係がないので、やめておく。しかし一点だけ追加したい。このがりがり亡者が、お婆さんをとろうと算段したことだ。それがばれると、奥さんが“佛然として大いに怒り、手を以て鶏卵を撃ち之を砕く。”ここにおいて、家当は全部夢と消えた。

この話は、いろいろの問題を提供しているようだ。このがりがり亡者も、財産の蓄積には時間がかかることを承知していた。だから、妻との計算では、十年でひと財産が築けることになっている。この期間は許せるとしても、彼の計画は根拠がなく信頼性に乏しい。しかも一つの仮説の上に、次の仮説が積み上げられ、全てが仮説の上に成り立っている。十年後のことも、絵にかいた餅で、空想を現実と見做している、ここが守銭奴の本音を露わにしており、ついに妻の怒りを買って、彼の家産が一瞬にして無に帰したのである。彼の計画は、実地生産から出発しておらず、ちよろまかし手段で蓄財を追求している。



明代五十両金貨 北京明十三陵長陵の展示

彼の最初の卵はどこからきたかと、問われれば。答えは、拾ってきたのである。ここが少し怪しい。この拾ってきた卵を隣の雌鶏が生んだ卵と一緒に抱かせ孵化させる。その目的は、泥水に大魚を掴もうという魂胆で、なにがなんでも雌鶏を抱いて帰ってくるのだ。だから、儲けのスタートから使った手口は、盗みと騙しが混然一体の手だ。

それから、彼が考えていることは、鶏が鶏を生み、鶏を銭に替え、銭で牛を買う。牛が繁殖して、牛を売って銭を得る。銭を貸付ける。この一連の利益計画は、生産計画を根拠にしていない。この流れのメイン手段は、ほぼ投機と剥ぎ取りで、これで利益を実現しようとするのだ。江盈科が描く“市人”は“甚貧”であるが、苦勞をなめている人民ではない、多分中世紀の都市における破産商人の類であろう。こんな奴らの頭のなかは、詐欺と剥ぎ取り戦略しか詰まっておらず、真面目に生産労働に従事しようという気がない。こんな輩は、ひと財産あてても生産事業に手を出そうとは考えず、考えることはお婆さんだけで、だから最後は夫婦喧嘩で幕が下りるのであるが、これは当然といえば当然のことである。

いつの時代でも、労働が富を築く唯一の方法であるを知っているのは、真面目な労働者だけだ。そういう人でなければ、このいかさま蓄財の思想を排除し、自分の体で真面目に働き、社会の為に、自身のために財産を造り、財産を蓄積することが出来ない。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

『一个鸡蛋的家当』ひとそえ

作者の鄧拓もコメントしているように、ありふれた皮算用であり、庶民といっても汗水流す労働者が主人公ではなく、銭に窮した小商人の話としています。

1978年以降、鄧小平の「先富論」を「早い者勝ち」と意識した人たちが様々な工夫をして財を追求した話を連想します。売血という究極の方法で購入した中古三輪車を元手に運送会社を立ち上げた話、大連奥地の農村女性が数台のミシンを元手に立ち上げた縫製工場が日本の量販スーツの供給元となった話など枚挙に遑がありません。



鄧小平

著名な社会学者の費孝通氏がたしか「女中が主家に乗っ取ったようなものだ」という下世話な表現をしたという事例も見えました。国营/国有企業の従業員が民営化政策のどさくさに、企業を自分のものにして董事長におさまる。その手下たちは社宅を格安で自分のものとする。それらを元手に大手製造業や不動産業のオーナーになっていくという膨張速度は凄まじいものでした。

大連のオーナーは政治に入れ込み過ぎて行動を制限され、不動産業者がスポンサーだったプロサッカーリーグは風前の灯、金の卵を育てあげるのは容易ではないですね。

井上邦久

一个鸡蛋的家当 原文

说起家当，人们总以为这是相当数量的财富。家当的“当”字，本来应该写成“幣”字。幣是货币贮藏的意思，读音如“荡”字，北方人读成“当”字的同音，所以口语变成了“家当”。

我们平常说某人有了家当，就是承认他有许多家财，却不会相信一个鸡蛋能算得了什么家当！然而，庄子早就讲过有“见卵求富”的人，因此，我们对于一个鸡蛋的家当，也不应该小看它。

的确，任何巨大的财富，在最初积累的时候，往往是由一个很小的数量开始的。这正如集腋可以成裘、涓滴可以成江河的道理一样。但是，这并不是说，无论在什么情况下，你只要有了一个鸡蛋，就等于有了一份家当。事情决不可能这样简单和容易。

明代万历年间，有一位小说家，名叫江盈科。他编写了一部《雪涛小说》，其中有一个故事说“一市人，贫甚，朝不谋夕。偶一日，拾得一鸡卵，喜而告其妻曰：我有家当矣。妻问安在？持卵示之，曰：此是，然须十年，家当乃就。因与妻计曰：我持此卵，借邻人伏鸡乳之，待彼雏成，就中取一雌者，归而生卵，一月可得十五鸡。两年之内，鸡又生鸡，可得鸡三百，堪易十金。我以十金易五犆，犆复生犆，三年可得二十五牛。犆所生者，又复生犆，三年可得百五十牛，堪易三百金矣。吾持此金以举债，三年间，半千金可得也。”

这个故事的后半还有许多情节，没有多大意义，可以不必讲它。不过有一点还应该提到，就是这个财迷后来说，他还打算娶一个小老婆。这下子引起了他的老婆“佛然大怒，以手击鸡卵，碎之”。于是这一个鸡蛋的家当就全部毁掉了。

你看这个故事不是可以说明许多问题吗？这个财迷也知道，家当的积累是需要不少时间的。因此，他同老婆计算要有十年才能挣到这份家当。这似乎也合于情理，但是，他的计划简直没有任何可靠的根据，而完全是出于一种假设，每一个步骤都以前一个假设的结果为前提。对于十年以后的事情，他统统用空想代替了现实，充分显出了财迷的本色，以致激起老婆生气，一拳头就把他的家当打得精光。更重要的是，他的财富积累计划根本不是从生产出发，而是以巧取豪夺的手段去追求他自己发财的目的。

如果要问，他的鸡蛋是从何而来的呢？回答是拾来的。这个事实本来就不光彩。而他打算把这个拾来的鸡蛋，寄在邻居母鸡生下的许多鸡蛋里一起去孵，其目的更显然是要混水摸鱼，等到小鸡孵出以后，他就将不管三七二十一，抱一个小母鸡回来。可见这个发财的第一步计划，又是连偷带骗的一种勾当。

接着，他继续设想，鸡又生鸡，用鸡卖钱，钱买母牛，母牛繁殖，卖牛得钱，用钱放债，这么一连串的发财计划，当然也不能算是生产的计划。其中每一个重要的关键，几乎都要依靠投机买卖和进行剥削，才能够实现的。这就证明，江盈科描写的这个“市人”，虽然“贫甚”，却不是劳苦的人民，大概是属于中世纪城市里破产的商人一流，他满脑子都是欺诈剥削的想法，没有老老实实地努力生产劳动的念头。这样的人即便挣到了一份家当，也不可能经营什么生产事业，而只会想找个小老婆等等，终于引起夫妻打架，不欢而散，那是必然的结果。

历来只有真正老实的劳动者，才懂得劳动产生财富的道理，才能够摒除一切想入非非的发财思想，而踏踏实实地用自己的辛勤劳动，为社会也为自己创造财富和积累财富。